

リンパ浮腫とは

リンパ管が傷んでリンパ液の流れが滞ることで生じる腕や脚のむくみ。乳がんや子宮がんの治療の後遺症で表れることが多い

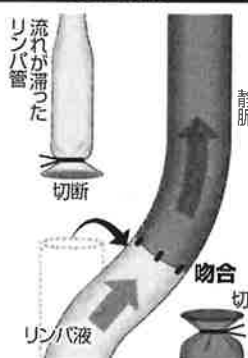


リンパ管細静脈吻合術(LVA)とは

流れが滞ったリンパ管を静脈につないでリンパ液の流れを良くする。1.5mmに満たない管を顕微鏡で拡大して見ながら行う手術



吻合の例①



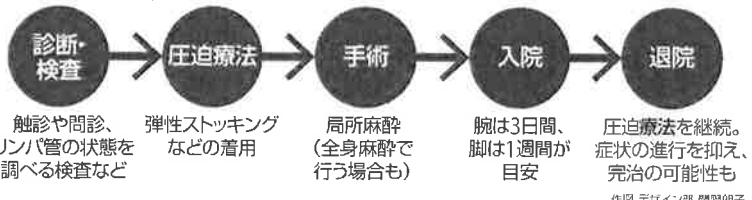
吻合の例②



LVAを行っている主な医療機関

北海道・東北	北海道大、岩手医大、福島県立医大
関東	国立国際医療研究センター(東京都)、横浜市大、横浜市立市民、聖マリアンナ医大(川崎市)、埼玉医大
中部	中部ろうさい(名古屋)
近畿	大阪医大
中国・四国	岡山大、広島大、小郡第一総合(山口県)
九州	九州大、福岡赤十字、九州がんセンター(福岡市)

LVA実施の流れ



軽症 高確率で完治

埼玉県坂戸市の大江路(おおえ)さん(43)は、2014年3月に子宮がんの手術を受けた。美容師として職場復帰したが、長時間立ったまま仕事を続けたことで、左脚のむくみや腫れがひどくなった。疲労感も強かった。診断はリンパ浮腫。一生治らないと思っていたが、15年7月に外科治療を受け、現在はほぼ完治した。(赤津良太)

リンパ浮腫の外科治療

リンパ浮腫は、リンパ液の流れが滞って脚や腕にたまり、むくむ病気。たんぱくや白血球などを運ぶリンパ液は、感染やがんが全身に広がるのを防ぐが、うまく流れなくなると、細菌に感染して脚や腕全体に炎症が広がる「蜂窩織炎」が起きやすくなり、重い臓器障害を引き起こす敗血症で命を落とすこともある。

患者の多くは、乳がんや子宮がんなどの手術を受けた女性だ。リンパ節を取ったり放射線を当てたりする治療により、リンパ管が傷み、リンパ液が皮膚の下にたまって浮腫となる。手術後の発症率は、乳がんが約10%、子宮がんは約25%とされ、毎年約1万人が発症していると考えられる。

高難度の手術

LVAは、流れが悪いリンパ管を静脈とつなぎ合わせ、リンパ液の流れを改善させるものだ。直径0.5mm、前後のリンパ管と静脈をつなぐため、長さ3mm、ほぼどの針と髪の毛の半分より細い糸を使う。肉眼で見えにくい細部を拡大するため、顕微鏡をのぞき込んで行う高難度の手術だ。

まず圧迫療法

治療は、弾性ストッキングなどを用いる「圧迫療法」が中心。専門的な医療技術が必要なマッサージ

この病院でも受けられる治療ではないが、大江さんの手術を担当した聖マリアンナ医科大学(川崎市)形成外科助教授の関征史(せいき)さんは、「最近顕微鏡の性能が上がって、針や糸の改良も

進んだため、手がける医師が増えてきた」と言う。手術前に、リンパ管や静脈の位置などを検査で確かめる。圧迫療法も続け、できるだけ良い状態を保つ。皮膚を2〜3mmほど切開する手術のため、局所麻酔で行う医師もいる。つなぐ本数などで異なるが、通常は3時間前後で終わる。安静のため、脚の場合で1週間ほど入院が必要となる。

退院後も圧迫療法は継続する。弾性ストッキングなどによる圧迫を段階的に弱め、着けなくても問題がなければ完治となる。症状が軽い方だった大江さんは、手術から1年半後に弾性ストッキングから解放された。「体はもちろんだが、精神的に楽になったことが大きい」と笑顔を浮かべる。

蜂窩織炎の発症頻度は、手術前と比べて手術後1年間で約8分の1に減った、との学会報告もある。一方、手術してもリンパ液がうまく流れなかったり、次第に流れが悪くなったりするケースも出ている。

すべての患者に効果があるとは限らないが、同大形成外科助教授の堀川明義(あきよし)さんは「重症だと完治することはめったにないが、軽症であれば高い確率で治る。圧迫療法で症状が改善しなければ、手術も選択肢として考えてほしい」と話す。